

## [報告] 第23回歴史地震研究会参加記(野外見学会について)

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科\* 大浦 瑞代

### Impression Report of 23rd General Meeting

Mizuyo OURA

Ochanomizu University, 2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610 Japan

#### §1. はじめに

2006年9月17日に「大船渡の地震津波記録をたずねて」と題しておこなわれた野外見学会は、大船渡市における明治29年(1896)と昭和8年(1933)の三陸地震津波被災現場を半日で巡るものだった。

事前配布された見学会案内書は、行程や見学地ガイドに加え、明治・昭和の三陸地震津波やチリ地震津波の被害概況、被害の様相を生々しく記述した関係資料、俄かには信じ難い光景を写し取った絵や写真、そして旧赤崎村を対象に津波被害から再興する「家」や集落を詳細に分析した論文を収録し、非常に読み応えのある冊子であった。

参加者は52名で、バスの補助席が埋まるほどだった。道中の解説は山下文男氏、今村文彦氏、北原糸子氏、都司嘉宣会長によって、日本語と英語でおこなわれた。当日は朝方まで雨模様だったが、見学会中は降られずに済んだ。幾分肌寒く感じられたものの、雨に濡れた石造物は銘文が読みやすくなっていた。

#### §2. 行程

8時30分到大船渡プラザホテル前を出発し、洞雲寺へ向かった。寺では住職さんが、明治三陸地震津波犠牲者の大位牌「丙申大海嘯溺死者諸精霊等」(写真1)の来歴を説明して下さった。大位牌には町村別、世帯別に犠牲者の俗名が朱字で記されてい



写真1 明治三陸地震津波犠牲者の大位牌

る。その数は、見学会案内書では5,676名とされていたが、実際に数えた住職さんの話では6,500名以上あるとのことだった。見学中、山下文男氏が自身のお婆様の名前を指し示して下さった。また、住職さんから明治・昭和の三陸地震津波で犠牲になった方の過去帳2冊も見せていただいた。洞雲寺山門前には、津波襲来時の状況や被害等を刻んだ「大海嘯記念碑」が建っている。この記念碑と大位牌は、七回忌を迎えた明治35年(1902)に造られたものである。

次に、旧綾里村へ向かった。ここには水合(道合とも)という所がある。その名称由来として、東側の湾(綾里湾)と南側の湾(綾里漁港のある湾)の両方から浸入した津波が合わさった場所、という話が伝えられている。これは、災害の記憶を伝える意味が付与された地名と捉えられよう。この地では明治三陸地震津波の波高が38.2mにも達し、電柱に掲げられた水位表にはその数値と共に「災害は忘れた頃にやってくる」という警句がある(写真2)。近くに所在する「明治三陸大津波伝承碑」は、当時の惨状を現在に伝えている。



写真2 明治三陸大津波水位表(38.2m)

旧綾里村では昭和の地震津波以降、計画的な集団移転がおこなわれた。低地に密集する宅地を、津波を被らない高地へ移動させたのである。しかし山地

\* 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

を切り開いたために、土砂崩れが発生しやすくなった。海だけでなく、山からも災害が襲来する危険性ははらむことになったのである。そのようななか、白浜地区の野々前漁港では、海岸保全事業として平成12年(2000)に延長464mの防潮堤が竣工した。港で網を繕いながら筆者に声をかけてくださった漁師さんたち(写真3)は、これで幾分か安心して暮らせるようになったのだろう。



写真3 野々前漁港で出会った漁師さんたち

旧赤崎村の合足地区には下車できなかったが、車中で被害の詳細と村再興の過程について解説があった。見学会案内書には津波碑と津波石が掲載されており、津波災害の痕跡が現在まで残されている様子を見ることができた。

綾里漁港では水門(写真4)を見学した。この水門は、ある程度以上の水位に達した海水が綾里川へ逆



写真4 綾里漁港の水門

流するのを防ぐものである。水門に連なる防潮堤にはイラストと共に「地震があつたら津波の用心」という警句がある注意板と、避難路の指示板があつた(写真5)。津波注意板は野々前漁港の防潮堤でも見られたことから、要所ごとに設置されていることがわかる。



写真5 綾里漁港防潮堤の津波注意板と避難路指示板

その後、行程の予定にはなかつた山下家のお墓がある墓地も見学させていただいた。これは筆者の要望によるものであつたが、道路に面した狭い敷地のため、間近で見ることができたのは限られた人だけであつた。墓石に刻まれる年月日は地震津波発生日で、つまりは横死を遂げることになった日である。1基に同姓の名前が複数連ねられていることから、一家や一族を一緒に弔っているようであつた。ただし、全ての犠牲者に対してお墓が造られたわけではないだろう。生き残った縁故のある人に金銭的余裕がなければ、造立は困難だつたと思われる。精神的拠り所として、形あるものを造らずにはいられなかつたのかもしれない。しかし、あらゆるものが流され遺品もない状況下では、形に残らない様々な弔いの仕方もあつたのではなからうか。津波に巻き込まれた遺体は、個人の特定期どころか老若男女の区別さえつかず、行方不明者が多かつたという。言葉にし難い感情が込み上げるなか手を合わせ、その場を後にした。

赤崎公園にある「津波記念碑」は義援金によって造られたもので、正面に「地震があつたら津波の用心 津波が来たら高い所へ」と刻まれている。高台に建つこの碑はまるで、津波が来た海を見下ろしているようであつた。ここで、見学会参加者の集合写真を撮影した(写真6)。

予定ではこのあと丸森地区へ移動し、大船渡湾口の防波堤を一望することになっていた。しかし時間の都合上、帰途の車窓から眺めることになった。向かつた「おさかなセンター」の1階には、三陸の豊かな海の幸が売られており、種類の多さに思わず心が浮き立ってしまった。買い物カゴ一杯の買物をされた方もいたようである。2階は「味処まんぼう亭」になっており、ここで参加者全員がサンマ定食をいただいた(写真7)。大船渡港の水揚げサンマは鮮度抜群で、直送便には全国から注文があると聞いた。懇親会ではサンマの刺身に驚き、こんな贅沢は大船渡でなけれ



写真7 まんぼう亭のサンマ定食(画像+つみれ汁)

ば味わえないと感じていた。ここで再び脂の乗った張りのあるサンマを刺身・焼き・つみれで食することができ、名残惜しくも幸せな締め括りとなった。

昼食後、大船渡プラザホテルへ戻るグループと一ノ関駅へ向かうグループに分かれて、見学会は解散となった。

### §3. おわりに

筆者は今年度入会したばかりで、初めての研究会参加だった。大船渡へ向かう前には多少の不安もあったが、たくさんの方と知り合うことができ、非常に有意義な時間をいただいた。見学会では被災現場に身を置きながら話を聞くことで、時に苦しく感じることもあった。しかし、貴重な体験をさせていただいたと思う。NHK のインタビューに答えたことも、良い思い出となった。

末筆ではありますが、本大会の開催・運営にご尽力された皆様に、心より厚くお礼申し上げます。



写真6 見学会参加者の集合写真〔撮影:志田俊一氏 (大船渡市総務部防災管理室)〕